

クリシュナ神話における *yajña* と *pūjā*—*Viṣṇu purāna* より—

及 川 弘 美

0 本論は、クリシュナ (*Kṛṣṇa*) 神話における *yajña* (以下Yとする) から *pūjā* (以下Pとする) への移行および両者の関係から、クリシュナ信仰展開の一過程を捉えようとするものである。そこで、*Viṣṇu purāna* (以下VPとする)¹⁾ のクリシュナ神話のなかからYについての記述とPに類する記述をぬきだして検討する。今回扱うクリシュナ神話の範囲は、今日のクリシュナ信仰においても重要とされるクリシュナが驚異的な偉業をなしゴーパ (*gopa*) やゴーピー、(*gopi*) たちと遊んだヴリンダーヴァナ (*Vṛndāvana*) の森を中心とした場面に限った。まず、論を進めるにあたって、YとPとを次のように定義しておく²⁾。Y：神像等を一切用いず、ヴェーダに従って屋外に、ある特定の聖域を設け、火を焚き犠牲獣をはじめとする供物をくべるアーリア人の宗教儀礼。P：寺院または家などの屋内で神像を用いて、それに花・香・果物・牛乳・水等を捧げる宗教儀礼。

I まず、Yについてみていく。VPのクリシュナ神話では、5・2・7 (Y1, 以下順にY2…とする)、5・10・36 (Y2)、同37 (Y3)、同43 (4Y)、同44 (Y5)、5・17・7 (Y6)、同8 (Y7)、同16 (Y8) に見られる。これらは、ヴェーダの伝統的なY (Y6-Y8) とそれとは質を異にするY (Y1-Y5) とに類別できる。

Y7ではYの効力の偉大なことが述べられ、Y6・Y8は、ヴィシュヌの異称の *yajñapurusa* の記載が見られる。ブラーフマナ文献などでは、Yは祭祀の力そのものとしてみなされ、ヴィシュヌはしばしばYと密接に関係していることから、ここではヴェーダのYと同じYについて述べているといえる。

Y1は、ジャガッドダーリー (*Jagaddhārī*, ドゥルガー) 女神を称賛する場面である *yajñabhūtābhavastrayī* とある。この女神がヴェーダの神ではないことから、これはヴェーダのYが次第にヴェーダ以外の神に対しても用いられるようになったことを意味し、本来のYとは異なるものといえよう。Y2-Y5はクリシュナがゴーヴァルダナ (*Goverdhana*) 山を持ち上げる物語に含まれ、*giriyañā* (Y2, Y4, Y5)・*goyajña* (Y2)・*girigoyajña* (Y3)・*mantrayañā* (Y3)・*sitāyajña* (Y3)

という記述がみられる。特に 5・10・38-40 には *giriyañña* について、種々の供物とともに動物の犠牲を捧げ⁵⁾、そしてホーマ (*homa*, 祭祀の火) が捧げられる⁴⁾ことが説明されている。一応、伝統的な Y の形態をとってはいる。しかし、ゴヴァルダナの Y ではその火の神聖さや重要さよりも、動物の犠牲など供物を捧げることが中心となっているようである⁵⁾。また Y3 では, *mantrayaññaparā vipurāḥ sitāyajñāśca karṣakāḥ/girigoyajñasilāśca vayamadriṇanāśrayāḥ//* とあり、それぞれの生活のよるべに従ってバラモンはマントラヤジュニヤを、農耕者はシーターヤジュニヤを、そして牧畜者はギリ・ゴージャジュニヤに専念すべきことが述べられている。ここでの Y は繁栄と恵みをもたらすものへの感謝と称賛と崇敬の念などにより祭るという意味のほうが強⁶⁾。このような、Y は願望を成就させることを主たる目的とし、天の神のもとへ供物を運ぶ火が中心的役割を果たすヴェーダのとは異なり、本来の意味が失われてしまっている。以上のことから、ここでは、ヴェーダのとそれとは本質的に異なる Y が混在しているといえる。

Ⅱ 次に P についてみる。VP には P という言葉はみあたらないが⁷⁾、それに類する記述はある。それは、5・6・7 (P1 とする。以下同様) と 5・7・64 (P2), 5・19・1 (P3) である。

P1 には, *yaśodā śakaṭārūḍhabhagnabhāṇḍakapālikāḥ/śakaṭam cārcayāmāsa dadhi-puṣpa-phala-akṣataiḥ//* とあり、ヤショルダー (*Yaśodā*) が⁸⁾、幼児のクリシュナによって引っ繰り返されてしまったことに驚き恐れ、シャタカ (*śakaṭa*, 馬車) と壊れてしまった壺に、ヨーグルト・花・果物・穀物を捧げたことが描かれている⁹⁾。この場面では、このあとこの出来事を不吉な前兆と恐れて村人たちが、村を捨てて他へ移動してしまうのである。これらの記述から、この P に類似した儀礼は、邪悪なものを追い払い清めるといった呪術的な性格をもったものといえる。P2 は, *brahmādyairārcyate divyairyaśca puṣpanulepanaiḥ/* とあり、ヤムナー (*Yamunā*) 河に潜む魔物である蛇のカーリカー (*kālikā*) がクリシュナに打ち敗かされ彼に許しを乞うて、クリシュナを讃えている。さらに、P3 では, *evamantarjale viṣṇumabhiṣṭūya sa yādavaḥ/arcayāmāsa sarveśam puṣpairdhūpairmanoramaiḥ//* とあり、ヤムナー河でヤーダヴァ (アクルーラのこと) が⁸⁾、ヴァッシュヌ (クリシュナ) に花と香を捧げている。

さて、P に類する儀礼では、P1 の汚れを払うこと、悪魔払いといった呪術的意味合いをもつ儀礼と、P2・P3 のように、超自然的なものへの畏怖や敬い尊ぶ

べき対象への崇敬の念からの礼拝供養との2種に分けることができる。ところで、今日のPは、両者の意味をすべてを含んでいる。このことから、本来異なる意味と機能を持っていたこれらの宗教儀礼が次第に統合されて、今日のPが成立していったと思われる。また、これらの儀礼には、Pの顕著な特徴である寺院と神像に関する記述がみられないが、これは、クリシュナ信仰において寺院や神像がまだ、一般的になる以前で、Pとしての宗教儀礼が確立していなかったためと考えられる。

Ⅲ 以上、みてきたように、このクリシュナ神話では、Yといわれる宗教儀礼とPに類似の宗教儀礼が見られた。前者にはヴェーダ半来のYとそれとは異なるYとか混在し、後者には後にPとして統合されていく日常的レベルでの厄除け、悪魔払いの儀礼や神を敬い礼拝する儀礼などその他諸々の宗教儀礼が含まれていた。ここで留意すべきことはYはその本来の意味が薄らぎ、神への畏敬から祭り崇めるといふP的要素を含んだものとなったことである。これは、クリシュナ信仰の発展過程においてYからPへの移行はYが単に衰退したのではなく、本来のYの中にPの数素がはいり込み、次第にYが本来の意味を失いPの中に包含され解消されていったことを伺わせる。

- 1) テキストは版により多少異なるが、大意においては大差ない、ここではH.H. Wilson “Viṣṇu Prāṇa, A System of Hindu Mythology and Tradition”を使用した。
- 2) Pについての諸説およびYとのP関係については拙論、「クリシュナ信仰における祭祀の変遷に関する一考察」『史叢』50号、日本大学史学会 1993年
- 3) *tasmādgovardhanaḥ śailo bhavadbhirvidhārhaṇaiḥ/arcyatām pūjyatām medhyaṃ paśuṃ hatvā vidhānataḥ// (VP. 5・10・38)*
- 4) *samarcite kṛte home bhojiteṣu dvijātiṣu/ (VP. 5・10・40)*
- 5) 5・10・44-46 には、牛飼いたちが実際に祭祀を行なう場面が描かれている。それには *dadhīpāyasamaṃśādyairdaduḥ (VP. 5・10・44)* と供物については記載があるが、*homa* についてはなにも述べられていない。このことから供物が中心であることを伺わせる。
- 6) 5・10・19-24 にも、ナンダ長老が、雨が自分たちの生活を豊かにするため、その雨をもたらすインドラ神を人々は喜んで祭るのだということを説明している。
- 7) *VP. 5・10・25* に *śakurapūjane* の形がみられる。
- 8) *Bhāgavata purāṇa* (10・7・11, 12) では、ヤシューダーは、このクリシュナの仕事を悪魔がとつたためと考えパラモンに、お祓いをしてもらい、村人たちが *VP* と同様に花、水・穀物・牛乳などを捧げている。

〈キーワード〉 クリシュナ、ヴィシュヌ・プラーナ、ヤジュニヤ、プージャー

(東方研究会専任研究員)